

第 1 回研究開発・イノベーション小委員会での主要なご意見について

1. 意識改革について

<企業>

- ・技術開発は事業化計画とリンクしていないとうまくいかないので、経営層の理解や後押しが大事。
- ・オープンイノベーションは技術だけの問題ではなく、マーケットをいかに活用するかという経営リテラシーの問題である。
- ・日本企業の多くは、外部の知識を正當に評価する評価眼ができていない。
- ・企業が出向などの形で人材を外に出して経験を積ませるときには、戻ったときのキャリアパスをしっかりと計画しておくことが重要。

<大学等>

- ・人文社会・社会科学と理工の融合等、大学一体となつてのオープンイノベーションが必要
- ・マスターが就職のデファクトスタンダードになつていて優秀な人材がドクターに進まない。マスターの場合は会社に入ってから育成されるので、組織内の知の体系の特殊性に縛られる
- ・技術系の優秀な人材のキャリアパスを企業、大学内部の人やOBが示すべき。
- ・産総研と人材交流をすることは、重要な視点。
- ・ベンチャーマインドを持つ人材を学校で育てられるよう、教育者の教育も必要。

2. 流動化促進について

- ・産学連携のグッドプラクティスや、オープンイノベーションのプロジェクトがどんな風に始まって、どの期間でどのくらいのコストをかけたのかというロールモデルの共有が重要。

<大企業×ベンチャー>

- ・ベンチャーへのアプローチ方法や組むか否かの基準等の明確化が必要。また、それらに明るい人材の育成が必要。
- ・大企業がイノベーションをおこすにはベンチャーと組まないと難しい。そのため、イグジットとしてM&Aが非常に重要。

<産学連携>

- ・ うまくいく共同研究はアウトカム・目標が相互に共有されていて、それをどういうタイムスパンで組んでいくかがあらかじめ明確化されている。
- ・ 産学連携がうまくいくのは、企業側が若い優秀な人材を出してくる場合。
- ・ 企業と大学の求めるアウトカムはそもそも異なり、ターンアウトが短くなっている中で、そういうことを本気で腹を割って検討していくことが大事。
- ・ 産学連携をする際に企業からも教育に対するコミットメントを。
- ・ 本気の産学連携の指標として、知識の交流等の「質的」な取組も入れられると良い。
- ・ インターンシップを企業と一緒に教育的カリキュラムとして立ち上げることが大事。
- ・ 産学連携を行うためのコーディネーターをもっと育てるべき。

<大企業×中小企業>

- ・ 大手×中小企業の共同研究における守秘義務の設定等は、企業の力関係上難しいこともある。
- ・ オープンイノベーションについて、中小企業に向けても発信することが重要。

3. オープンイノベーションを進めるための環境整備

- ・ 産学連携については、間接費や人件費などの仕組みについて、仕組みはほぼ出来つつあるが、どうやったら本気で産業界がお金を出せるか悩んでいる。国が主導してくれると実現できるのではないか。
- ・ 国内大企業は、海外とはオープンに進んでいるが国内にはクローズなように思われる。将来（国にとって）必要なものがなかなか始まらないのであれば、官主導で始めるべき。始まればそれが官民連携になって、最終的には民主導になる。
- ・ 国全体のイノベーションシステムは悪循環にあり、変わる兆しはあるが遅い。システム全体で大きな変化を起こすためには、①悪循環のメカニズムのどこか一つに集中した取組を行うこと ②早めに成功事例を出すこと が大事。
- ・ 具体的な分野（サイバーフィジカル）を特定してオープンイノベーションすべき。
- ・ オープンイノベーションの理解が多様。今後事務局で整理してほしい。

以上